

---

# someday somewhere

役満九太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

s o m e d a y   s o m e w h e r e

### 【Nコード】

N 5 8 2 6 F

### 【作者名】

役満九太郎

### 【あらすじ】

自らジョーカーとなった剣崎一真が姿を消して数ヶ月。悩む相川始の前に現れた謎の女は…？

自らジョーカーとなった剣崎一真が姿を消す事で『バトル・ファイト』と呼ばれる戦いが一応の終わりを見せてから月日を重ね、季節は夏を迎えていた。

栗原遥香の喫茶店ハカランダには、昼下がりのこの時間、客の姿は見えない。

相川始は窓の外を見ていた。どこまでも続く空を見ていた。ここと同じ空の下にいるであろう、剣崎の事を考えていた。

「剣崎……」

その名を呟くのは何度目の事であろう……始は、溜息と共に剣崎の名を吐き出した。

「お前は今も……どこかで運命と戦っているのか？お前の選択は……本当に、それで良かったのか？本当なら俺が……」

始は唇を噛んだ。

その時である。

「ねえ……」

始の後ろから女性の声が聞こえた。遥香の声ではない。始は慌てて振り返った。

店内に客はいないと思っていたのだが、テーブルの1つに袖のない薄い緑のワンピースを着た女が座っていた。いつの間……いや、客が来た事にすら気付かない程、今の俺は呆けていたのか……人間以上の感覚を持つ俺が……始は、そんな事を考えて動けなくなっていた。女は、まるで始の心を見透かしているかのように笑みを浮かべ、その両目を見つめながら言った。

「このお店は、お客が来ても水とおしぼりは出ないのかしら？」

その言葉に我を取り戻し、始は慌てて水とおしぼりを用意し、女

の待つテーブルの上に置いた。女はテーブル脇のメニューを取りアイステイーを指さし、始はそれを厨房の遥香に伝えた。

「ねえ……」

再び女から声がかかった。どうやら、今度は遥香に向けられた物のようだ。

「彼の事…借りていいかしら…?」

その言葉に、始と遥香は顔を見合わせた。遥香は頷き、始はアイステイーで満たされたグラスを乗せたトレーを手に、その女の元へ向かった。

「俺に…何か用か?」

アイステイーのグラスをテーブルに置き、始は女の真正面に座った。

「あなたが…悩んでるようだから」

そう言いながら女は紙袋を破り、取り出したストローをグラスに挿した。

「悩みがない人間などいるものか」

「人間なら…ね。けど…あなたはどうかしらね」

「貴様…!!」

始の両目が、かっと思開かれた。

「あら…さすがに怒った?怖いわね…くすくす」

口ではそう言いながら、女には怖がっている様子などまるでない。むしろ、目の前にいる始の様子を楽しみながらアイステイーを味わっているようである。

「始の…怖がり…。くすくすくす」

あるいは、女の言う通りかも知れない。始は、目の前に座る女に対し、緊張感を解けずにいた。

「お前…何者だ…?」

「誰でもいいじゃない」

女はピシヤリと言いつつ切った。

「でも安心して。あなた達が戦った、アンデッドとかいっつのではな

いわ。それどころか、あなたやアンデッドと戦える力だっけ持っていないもの。あなたが本気になったら、そのままの姿でだっけ一捻りできるような、か弱い女でしかないわ」

「…さつきも言ったな。俺の正体を知っているのか？」

「一応ね。あなたが何者で、何をやってきたのかも知ってるわ。あなただけでなく、あなたの仲間達も…」

そこまで聞いて、始は確信した。確かに戦闘力がありそうには見えないが、この女が徒者でない、油断ならない相手だという事を。

始は、アンデッド等の敵と対峙した時とは違う緊張感を感じていた。

「けど、面白い結論を出したわね。あなた達は…」

「何…？」

女はそこで一度話を区切り、口を潤すためにアイスティを口に含んだ。

「本人を目の前にしてるから言いにくいんだけど…ジョーカーってほら、忌み嫌われる存在じゃない？言われて傷付いたんなら謝るけど」

「いや、いい。そう言われるのは慣れてるし、俺だっけ自覚してる」  
目に鋭さを宿らせたまま、始は自嘲気味に苦笑いを浮かべた。始の表情を見て、女はそのまま話を続けた。

「統制者は意地の悪い事をするわね。わざわざ、ジョーカーという忌み嫌われる存在も作り出したんだもの」

「…何が言いたい？」

「けど、市販されてるトランプの多くはジョーカーが2枚入ってるものね。ジョーカーも2枚なら…誰かがそこからはみ出す事もないわ。ジョーカーと言えども…ね。だからと言って、自らジョーカーになるなんて、なかなか出来る事じゃないわ。まして、人である事を捨ててまでなんて、尚更の事」

それが剣崎の事を言っているのはわかった。始は、剣崎の事を何故…と思ったが、それは愚問なのだろうとも思った。仲間の事も知っていると言った、それを証明して見せたに過ぎない。この女が何

を言い出そうが何を知っていようが、それは不思議な事ではないの  
だろう。始は、本能でそれを感じていた。

女は静かに目を閉じた。

「他のカケラ…こことは違う世界では、ジヨーカー封印という結末  
を迎えてるわね。あなたが望んだ通りに」

その女が何を言っているかはわからなかったが、それを納得する  
事は容易かった。何故なら、それは『この世界』においても始の望  
んだ事であり、もし『IFの世界』という物が存在するならば、そ  
れは十分有り得た結果であろうという事は容易に想像出来た。

女は再びゆっくりと目を開けた。

「もし…『その世界』で彼が少なからずの寂しさや後悔を感じてい  
たのなら、彼が『有り得ない記憶』を無意識の中で継承していると  
したなら…『この世界』での彼の行動は理解出来ると思うんだけど。  
彼の持つ本当の強さと優しさ、そして想いを知っているなら、何も  
心配する事はないと思うわ」

「何もわかっていないな…お前は」

始は溜息をつき、ポケットから1枚のカードを取り出してテーブ  
ルに置いた。カテゴリー2のカードである。

「これは？」

女はカードを手に取った。

「俺が人間として生きていけるのは、このカードのおかげだ」

「なるほど。つまり、このカードに封印されているカテゴリー2、  
つまりヒューマン・アンデッドが、あなたのジヨーカーとしての本  
能を抑えている…と」

女はカードを隅々まで見て、何かを納得したような表情を浮かべ  
ながらカードをテーブルに戻した。

「そういう事だ」

「違うわね」

女は再びピシヤリと言い切った。

「たしかに、このカードにヒューマン・アンデッドは封印されてい

るわ。でも、それだけじゃない。このカードには、あなたを信じ愛してくれている多くの人の想いが込められている。その想いが、ジョーカーの本能を抑えつけ、あなたを人間の中で生きられるようにしてくれていると思っただけで…違っただかしら？」

始はテーブルに置かれたカードを取り、それを見つめた。

「このカードを持つてるのはあなただけ。けどカードなんて、わかりやすい形にただだけの物に過ぎないわ。彼にも、多くの人の願いと想いがある。そして、何より本人自身のね。だとしたら、答えは簡単なんじゃない？」

女は笑みを浮かべて始を見つめた。その笑みは先程までと違う、始を安心させる物だった。

「彼…どんな顔してた？」

「えっ…」

始は、あの時の剣崎を思い出した。いや、わざわざ思い出すまでもない。片時も忘れた事などないのだから。

「あいつは…笑ってた…」

「そう…」

今度は、女の方が安心したような満足げな表情を浮かべた。

「だったら、あなたも信じてあげたら？昔…私の仲間が、口癖のように言ってたわ。運命なんて金魚すくいの網より簡単に打ち破れる、みんなが信じれば運命に勝てる…ってね」

「そう…だな…」

始は、この女に対し初めて心からの笑顔を見せた。

「そつだ。この店、シュークリームのテイクアウトは出来るのかしら？手ぶらで帰ると、あうあう文句言う奴がいるのよ」

「あ、ああ。ちょっと待ってくれ」

始は席を立ち、厨房に戻って遥香に女からの注文を告げた。遥香が準備している間、始は1度だけ女の方を振り返った。女はアイスティーを飲み終え、グラスの中に残る氷をストローでかき回して遊

んでいるようだった。その子供っぽい仕草と先程までの様子にギヤツプを感じ、始は笑みをこぼした。

遥香からシユークリームを詰めた箱を受け取り、始は女の待つ席へと戻った。

「もう1度聞く。お前は…何者なんだ？」

始は、女にシユークリームの箱を差し出しながら訊ねた。女は箱を受け取ながら答えた。

「…百年の魔女」

「魔女…？」

どのような答えが女から返ってこようが驚かないと思っていたが、『魔女』という単語は想定外だった。現実味を感じさせない言葉ではあるが、先程までのやりとりを考えれば、それはそれで納得出来ないわけではない。

「くす…。なんて、単にそう自称してるだけよ。通りすがりのお節介女…それで、いいじゃない？」

女は悪戯っぽく笑った。いや、この女の笑みに邪気が感じられなからこそ、始はわからなくなる。この女が何者なのか…。

少し俯いていた始は、もう1度同じ疑問を口にしようと思顔を上げた。が、既にその女はそこにいなかった。夢？それとも幻？いや、テーブルの上に置かれたアイスティーとシユークリームの代金が、今までここに女がいた現実を教えてくれている。

いつの間に…いや、まだ遠くには行ってないはず。そう思い、始は駆け出し、店のドアに手をかけた。

「うわっと…！」

「どうしたんですか、相川さん。そんな血相変えて」

始は、店に入ろうとした橘朔也と上城睦月の2人と鉢合わせになった。

「橘…それに睦月。今、女とすれ違わなかったか？こう、長い黒髪の女だ」

始は、手振りを加えながら橘と睦月に訊ねた。

「女？いや、見なかったと思うが…」

橘と睦月は顔を見合わせた。本当に知らないようだ。それを見て、始は再び走り出そうとした。が、その直後、始の耳に入ってきた物が、始の足を止めた。

「虫の…鳴き声…？」

「ああ。これは、ひぐらしですね」

始の疑問に、睦月はすかさず答えた。

「ひぐらし？」

「蝉の一種だ。もっとも、今年は少し早いようだけどな。それがどうかしたのか？」

橘はひぐらしの声が聞こえる方に耳を向けた。隣にいる睦月も、ひぐらし達の合唱に聴き入っている。

「俺に…何か言っているような気がする」

始はゆっくりと目を閉じ、ひぐらしの声に耳を傾けようとした。

「だとしたら、それは剣崎からの伝言かも知れないな。俺は頑張ってる、必ず運命に勝ってみせる…ってな」

橘は始の肩を軽くたたき、睦月と共に店に入ってしまった。

「そうかも…な」

始は微笑みながらゆっくりと目を開けた。そして、ひぐらしの声に答えるように呟いた。

「お前達…。もし、お前達やお前達の仲間が剣崎に会う事があったら伝えてくれ。俺は信じてる、お互い運命に必ず勝てるってな。2度と会う事もないなんて、悲しい事は言うな。ジョーカーに課せられた運命に勝った時、いつかどこかで必ず会える。みんなで笑ってな…」

ひぐらしに笑顔を向け、始は店の中に戻っていった。

人間達の中で生き続ける…剣崎の言葉を胸に刻み、ジョーカーではなく人間・相川始として生きていく。互いに運命に勝った時、いつかどこかで笑って会える日を夢見て…。

(後書き)

Epilogue

「あうあう……」

「あら……着いてきてたの？」

古手梨花は、声のする方に振り返った。そこには羽入がいた。

「僕はいつも梨花と一緒になのです」

「そうかしら？時々、勝手に出てって他の人をストーキングしてるじゃない」

梨花は意地悪く笑って見せた。

「けど、ごめんなのです」

ふいに羽入が謝った。

「本当なら僕がやらなきゃいけないのに……。でも、統制者というのは、僕なんかよりももっともっと上位の神様なのです。僕には軽々しくお話する事も出来ないのです」

「そんな事……別に気にしてないわよ」

先程までの意地悪な笑みから一転し、梨花は羽入を気遣う笑みを見せた。

「それに、統制者とやらが何であれ、結局は一真と始の問題でしょ。私はごめんよ。やつとの思いである袋小路を抜け出してここまで生きてきたのに、簡単に世界が滅亡するなんて」

「それは……僕も嫌なのです」

「だったら、私は自分の出来る事をするまでよ。あの100年にも及ぶ旅に比べたら、全然大した事じゃないわ」

それでもまだ、羽入はすまなさそうな顔をしている。

「梨花は……強いのです……」

「そんな顔しないで。せつかく、あんたのためにお土産も買ったんだから」

そう言って、梨花は羽入の前にシュークリームの入った箱を差し出した。

「あうあう！ハカランダのシュークリームは美味しそうですね。僕は待ちきれないのでしょ！」

「どこのシュークリームを見ても同じ事言つくせに。いいわ。もう少し行った所に公園があつたから、そこで食べましょ」

シュークリームに目を輝かせる羽入に呆れながらも、梨花はひぐらしの鳴く小道を急いだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5826f/>

---

someday somewhere

2011年3月20日18時40分発行